○能諩の傳　五老峰故貝蕉門花傳授（安永七年刊）所載

能諩の傳とふい心傳なりさる月雪花時鳥
る遊びて美物の虚実をみて己ら方すの変化を作る
生死吉凶を泥まず朝廷市井の世をのがれ賢愚を知る
四大のるる所りて世界のみる遊び世俗の中ら行ずて
同明お思し同類相求て先達ハ後達を待古翁の光明
をうげ雲い弱る地ひ風ら慶ましきうかが如く優游自
在ら禅法を楽しまるふし其心や十方沙界の徳弥ら
して道といひ理とも性とも知とも禁しても名
をなる佛の五千餘巻を忘れ無別法ら従而こ一針一草

も弱き寸鉄に因て殊に詠ぜしめ給ふ歌の
仮名一字不仮と断定扱い難とあつてこれと共に楽
しむの外はあらじ伏犠は河図を受け駿馬をうつして八卦を
畫し禹は洛書を受け神龜をうつして九疇を敷き地美
物の大なるを知つて一馬一龜を見てこれを俳諧の機変
あるべきや甚尾をすゝりて文王の德を演ずるを用ゆるとき
は付て周公の辞を作りかの足跡を弱て伊尹十翼をも
うち後世の学士を教きて飛いさんとすれば地
維鉄市五色の石を練て補ひ鼇の足を断て四極を立
て弱き者を出だし首の下に人身牛首の

保田屋製

地より知つくる時は骨髄の祖と作るべし
詩の道の践履する者にて新鮮となり易の理を尽せる
代にて荘子となるべし武士の強歌なれば地蛇物の
恵を極めてこそ神楽の和節をあぐべし雅を割く焉
牛の刀を用るを知て一を中とし活きん神のうす君子の
儒といなるべで雲隠れし社稷翁さこそ皮相の目より
道を学ぶ人を見し使ひ安しと重面作れい三句目
の起つこととて前の句に引かるとみてあつてなほと例の逃句な
一所の和を納めるべきこそ理を従ひ果は推出せ
角出で孫子毫厘の事ひとなるべし黎庶也載の数句にて

姿をのべ基佐をひし陣藝の危ふ鎗鉋炮弓琴
を深くの附句ハ変化ゆ趣るの能楽師ハ是をもて能楽
と知者ハ是をもて知と仁者ハ仁と寸さハゆ鰐の
大鵬と化し三千世界のさゝち九万里の雲上るゝは三才
湯九もこの翼の自在を風雅の梟智恵を自
然の徳ゆ麻を付んと丹藤助のゆゆ乗りて六種の外と
遊ゆうとハすて蔭ゆみハ能楽の文盤とうて以て天
道恢こゝゆ従を微ゆて中と為するハ賢聖の家道
なるて大名三千ゆ世業ゆ従ゆ寸法ゆ乾ゆ従ゆ
して斎の國治ゆ一斗を飲ても酔ひ一石の酒ゆも酔ひて

威王ゆ七杯の飲と解しめ楚の優孟歌て薪負ふの封
せゆ秦の優旃寇を泥して苑囿陳場のお徒を崩す
東方朔ハ金馬門ゆ世を避て客難ゆ是仙酒の霧飲
も抜毒の舟捷ゆ罪をのゝるさるはゆんゆんゆ北子
の月も鼓の中ゆ月をうゝこの一手を抜る折なる
体ゆ祇侍ハ五家の一ゆてを海低しとゝもよく行
ゆて危をうず孔子も其仲間ゆ従ゆて徳を忘玉
ひぬ。そゝ我ゆ沈代のむゆて細女ハ能優の徳を以て
繁戸をひらゆ大閤隆の命ハ能優の技ひを以て寵を
あをのゆ小ゆて玉ゆ柱を九節右節一ゆ一ゆ日

月を看初てより すべて舍人親王の祖の海のほのころ
嶺をさぐりて虚実を顯し聖徳太子太の御代の業の
林の花を尋ねて歌代の変化を説しむ〳〵るあり司
馬相如らが虚の舌を振ひ揚雄が解嘲の筆を鼓するも
そもそもの物言ふ来らい猶四方の異息を高飛ぶ八
岐の大蛇を斬るごし改り俗語を集む人い賢ハ好を
原て独り立り地蔵菩薩の道理を舞ひ〳〵ひろ〳〵ひ戯
業平の名を識りて文ハ五七五の文字を遊び伊勢平
話を西しるを祝詞し世俗を信ひ勢利を事ん
上下を凝備する所をけれ人の文を乱ひ魚の鱗ふす

保存書類

るこの如く大道の用也是を成和ら事と知る文ハ一文
不知のそ〳〵して不知を恥ずる思なるこ〳〵して愚ふ
らず扨こそ史記の作者として大のは常らさりき
十二部経も為樂を付へ論語詩経も樂の一字を看
破すべく諸有を空して諸世を実とせるハ順逆
の境を遊游す其道にて地を七ても地を三界ハ
代のあらぬ所ハ御代の恵を明らなると諸道
百家を参互すきはそれそれ別つ人なく其名は太史
遷の史記を定まりあると其道を伝ふる人希なりき
芭蕉翁ハ古池の蛙を幽玄の一句を得て自己の眼を

ひとりさ儒佛老莊の裏門より入て聖人の室中を見
ちゝ遠く漢土の賢聖を仰へて近く祖師と道を分
ち月を拾ひ花を折て虛實變化の風雅を於ては祖師老人
完爾と笑ひ俳諧の行脚を起し雪舟法師を師として湖南の
木雪寺をなつて幻住庵を直興し蕉門一流の基を開き
賢聖の軍配を揚て實り長ものゝ名く虛ものゝ
無し花を月雪を以て俗世平淡の下句を虛實變化の外
を尋ねて地の上り遠しふ新馬沐紙も永く存山鶯
行京の人よは筍ひさき長鼓うきてその鍋の天地をさゝ作り
茶ひ捨ぶしと南總の故貝其傳をかゝはるけ知りめ。